

図書館と読書の思い出

情報工学科主任 浅井 文男

図書館という言葉を知ると真っ先に思い出すのは学生時代を過ごした大学の付属図書館である。私が大学の教養部に在籍していた当時、すでに学園紛争は下火になっていたが、それでも全学ストライキは年中行事として存続していた。「全学スト決行中」の立て看板で校舎から閉め出された学生の行動は3つに分かれた。一つは下校する、一つはサークルのボックス(部室)に行く、そしてもう一つは図書館に行く、である。私は入学当初に加入した文系サークルのボックスに入り浸った。そこでは文学部や法学部など、私には縁遠い学問を専攻する先輩たちが文芸談義に興じる傍ら、「Das Heft」と銘打った日記帳に辛口の批評を綴っていた。ケータイもインターネットもなかった時代、「Das Heft」はコミュニケーションツールの役割も果たしていた。遠慮がちにつぶやくことから始めた私も、いつしか書き込み談義で盛り上がった書物を図書館で探し出しては読むようになった。四畳半一間の下宿とは別世界のような快適な閲覧室と豊富な蔵書、それに有り余る自習時間に恵まれて、「Das Heft」に触発された書物に親しむことが私の日課となった。その頃読んだ書物から推薦図書として一冊を挙げるとすれば、英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」を除いて他にはあるまい。昨今流行の電子書籍版もあるらしいが、ドイツ古典文学の最高傑作を堪能するには、やはり相良守峯訳の定番文庫本がお薦めである。

教養部から専門課程に進むと図書館で親しむ書物は専攻する専門分野の教科書や論文誌に変わった。全学ストの影響で専門課程に進むのが半年遅れたこともあり、目一杯の背伸びをしては名著の誉れが高い教科書を選んで読破に挑むのが日課となった。こうした書物は運がよいと通学路周辺に散在する古本屋で手に入れることもできたが、図書館がなければ私の血気にはやった企ては見果てぬ夢に終わったであろう。朝永振一郎の「量子力学」しかり、ディラックの「量子力学」しかり、である。どちらもタイトルは同じ「量子力学」であるが、まったく異質の教科書であった。前者は大河ドラマ仕立ての豪華絢爛な歴史絵巻を手汗握る臨場感で読み耽る経験をさせてくれた。後者は遙か彼方の地平線まで一直線に伸びるハイウェイをスポーツカーで疾走する心地よさを体験させてくれた。

あれから40年余り、「ニーベルンゲンの歌」や「量子力学」のような分厚い書物はめっきり読まなくなりました。休日には近くの図書館に足を運び、閲覧室で軽い読書を楽しんでいるが、学生時代に味わった目眩く読書とまるで違うことは言うまでもない。学生の皆さん、心に残る書物はありますか？ なければ今だけです、図書館で出会えるのは。